

ハイエク社会理論体系の研究(四)

——抽象・規則・秩序⁽¹⁾——

古賀 勝次郎

目次

はじめに

(一) 抽象の優位性

(i) 「抽象的なものの優位性」の命題

(ii) 抽象的規則と秩序

(iii) 抽象と科学の問題

(二) 感覚秩序または精神的秩序

(i) 神経系と分類 (classification)

(ii) 超・意識的規則と精神的秩序

(三) 社会的秩序

(i) 二つの社会的秩序

(a) cosmos : 自発的秩序

(b) taxis : 設定された秩序

(ii) 経済的秩序 (catalaxy)

むすび

はじめに

社会科学は、近代社会の生成、発展に相応しい方法で形成されたのであるが、それは、社会の進歩が最も早かったイギリスでは「道徳哲学」(moral philosophy)と呼ばれていた。近代社会の著しい特徴は、分業が高度に発展した、ハイエクの好んで用いる表現を使えば、知識が社会全体に広範に分散されている社会である。⁽²⁾このような近代社会の特徴をいち速く洞察して、社会科学の確立に貢献したのが、近代初期の主としてイギリスの社会学者達であった。彼らは、近代社会に発生している現象の多くが、人間の行為の結果であっても、人間の設計(design)によるものではない領域からなっていることを明らかにした。⁽³⁾彼らは、近代以前の《physis》と《thesis》の二分法に基づく神人同形性論的思考(anthropomorphism)を排して、人間の行為(human action)を分析の中心に置きながら、社会の総合的把握を試みたのである。従って、当然そこでは、精神、法、法律、経済など、およそ人間の行為に関わるさまざまな概念が、社会科学を構成する重要なファクターと考えられていた。十七世紀から十八世紀にかけて、イギリスにおいて展開された「道徳哲学」は、まさにそのようなものであったと考えてよい。

ところが十九世紀に入ると、自然科学の圧倒的影響を受け、社会科学は、自然科学におけるように、厳密性と確実性が要求されるようになった。⁽⁴⁾確かに自然科学は、比較的単純な現象を対象とするので、厳密性や確実性の要求を容易に満たし得る。だが、社会科学にそうした自然科学的方法が要求されるならば、自然科学においてそうであるように、われわれは、その対象とする領域を限定しなくてはならぬだろう。十九世紀中期以降の社会科学は、実際このよ

うな方向を辿った。これが一般に社会科学の分化といわれるものだが、特にそれは、法律学と経済学の分野において顕著である。⁽⁵⁾しかし、このような社会科学の分化は、自然科学におけるように、果たして真の意味での社会科学の進歩と言ひ得るものであろうか。例えば、すべての先進工業国を悩ましているインフレーションは、単に経済学の問題に止まるものだろうか。否、インフレーションを単に経済学の問題として取り扱っているところに、今日の社会科学が直面している最も根深い問題が横たわっているとは言えまいか。

問題は、次のところにあると思われる。現代のように、知識の分散化が進んで、社会が複雑になってくると、当然、社会科学も専門化へと向かわざるを得ないであろう。けれども、このことは社会科学の専門各分野の間に、何らの関係がないということではない。いかなる社会現象も、無数に近い極めて複雑な諸要因からなっている以上、各専門分野に、密接な関係があることは言うまでもない。社会科学の専門化は、寧ろ、社会の要請に技術的に応えるものに過ぎない、と言う方がより適切であろう。しかし、今日われわれが目にしてゐる社会科学は、互いに何らの関係をもたない、専門化された各個別科学である。それ故、そこには単に技術的な意味以上の、別の理由が、現在の社会科学の専門化を押し進めていると考えなくてはならない。即ち、自然科学的方法を、無批判的に社会科学の領域に適用した結果、技術の意味での専門化とは違った、互いに何らの関係をもたないような社会科学の分化を導いていったのである。それは、自然科学に対する誤った理解から来ている。けれどもこれは、十九世紀以降の科学主義的偏向をもった社会科学にのみ帰せられるものではないであろう。「道德哲学」の形成に与った社会学者達の方法論に、寧ろ認識論と言った方がよいが、未だ明瞭でない曖昧な考えが残っていたことも、この傾向を強めた原因であった。

ハイエクは、近代初期に形成された「道德哲学」が不十分なまま残した認識論を、更に一層深く掘り下げ、その最

も根本のところから、彼独自の認識論を作り上げた。わたしが、「抽象的なものの優位性 (primacy of the abstract) の命題」と呼んでいるものがそれである。この認識論の確立によって、ハイエクは、恐らく J・S・ミル以来、誰もなし得なかった社会科学の総合化という課題に対し、彼なりの解答をもつことができた。ハイエクの社会理論体系は、すべてこの「抽象的なものの優位性」という命題を基礎として、展開されたといってもよいのである。なかでもそれは、秩序論、自由論、法・法律理論、正義論などにおいて、最もよく示されている。ここでは先ず、「抽象的なものの優位性」の命題がいかなるものであるかを述べ、次いでそれに基づいて展開された秩序論、つまり感覚秩序と社会的秩序について論ずることにする。

注

(1) もともと、この論稿は、「ハイエク社会理論体系の研究」の「二となるべきものであるが、「抽象的なものの優位性」(The Primacy of the Abstract) の論文を手にしたのは、昨年出た『新研究——哲学、政治学、経済学、および思想史における』(New Studies in Philosophy, Politics, Economics and The History of Ideas, 1978) においてであったのび、今回の問題を論ずる上になつた。従つて「二」はこの題の理解がその前提となる。

- (2) Hayek, F. A., Law, Legislation and Liberty, Vol. 1, 1973, p. 14.
- (3) Hayek, F. A., Die Irrtümer des Konstruktivismus, 1975, S. 6.
- (4) Hayek, F. A., The Counter-Revolution of Science, 1952, p. 13.
- (5) Hayek, F. A., Law, Legislation and Liberty, Vol. 1, 1973, p. 4.
- (6) Hayek, F. A., The Counter-Revolution of Science, 1952, p. 15. 詳しくは拙稿「ハイエク社会理論体系の研究」(「ハイエクの社会科学方法論」(『早稲田社会科学研究』第十七号、昭和五十二年) 参照。

(一) 抽象の優位性

ハイエクが「抽象的なものの優位性」という命題に導かれたのは、心理学および社会科学における研究を通してであるが、人間の精神と社会という本質的に複雑な現象の考察を進めていく過程で、それらが互いに他の理解の助けとなり、次第に明らかにされて来た概念である。ハイエクの心理学上の業績に対する評価は、これ迄も、断片的にはあるにはあったが、最近では、行動主義者 (Behaviorist) — 勿論、心理学における。しかしハイエクは行動主義に対してはかなり批判的である。⁽¹⁾ — の間にも、再評価しようとする動きが出ている。⁽²⁾ 一方、ハイエクの心理学は、社会科学者達からは殆んど注目されて来なかったと言ってよく、僅かに N・P・バリーがハイエクの社会経済哲学を論じた時、その重要性に言及したぐらいである。⁽⁴⁾ だが、ハイエク自身も述べているように、「抽象的なものの優位性」が、彼の社会理論体系を通して仮定されている根本の概念である⁽⁵⁾ことを考えるなら、われわれはハイエクの心理学に対してもっと注目してよいと思われる。

しかしわたしは、「抽象的なものの優位性」の概念を単にハイエク体系に占める重要性からのみ見ているだけでなく、「道徳哲学」を形成した主にイギリスの古典的自由主義者達が、曖昧にしか表現し得なかった認識論を、より根本のところから明確にしたものであると考えている。即ち、彼らは、神人同形同性論に基づく社会理論—宗教的に言えば、一神教の神学—を排し、人間の行為を中心に置く社会理論を確立することによって、中世から近代への移行プロセスを社会科学的に明らかにした⁽³⁾が、それがいかなる認識上の変化をもつものであるのか、更には、例えば精神と科学、科学と社会といったような問題についての認識論は、ついに不明瞭なまま残された。これらの問題を明確

にしたが、ハイエクの抽象の優位性の概念であるというのが、わたしの考えである。それ故、わたしはこの概念を敢えて命題と呼ぶのである。これらの問題―特に前者―は、非常に重要な問題であるだけに、別の機会に詳しく論ずることにして、ここでは「抽象的なものの優位性」の命題について、ハイエクの基本的な考えを述べるに止めざるを得ないが、だが、後者の問題を扱うことなくして、この命題はその意味が充分理解せられないので、その輪廓は少しく述べなければならない。

(i) 「抽象的なものの優位性」の命題

ハイエク自ら語っているごとく、「抽象的なものの優位性」の概念は、彼が実にその長い厳しい思索の過程で、最後に到達した地点を示したものであるが、しかしわれわれには、何かパラドキシカルな印象を与える。⁽⁶⁾「抽象的なもの」(the abstract)は、豊富な内容をもつある精神的実体から抽象された何かである、先ず豊富な内容をもつ精神的実体が最初に在って、そこから抽象されたものである。そのように理解されている。一般的に言えば、「具体的なもの」(the concrete)から「抽象的なもの」が引き出される、と考えられている。そのような発生的順序(genetic sequence)から、「具体的なもの」が、「抽象的なもの」に優位していると論ずる。けれどもハイエクは、心理学の研究を通して、それとは全く反対の結論を導いた。即ち、因果的(Causal)な意味で、「抽象的なもの」の方が、「具体的なもの」より優位にある、とハイエクは言う。⁽⁷⁾これは、従来言われてきている、「生得説」(nativism)―哲学的には、R・デカルトまで溯り得る―では勿論ないが、またイギリスのJ・ロックにはじまる「経験説」(empiricism)とも違っている。⁽⁸⁾寧ろハイエクの「抽象的なものの優位性」の命題は、このような「生得説」と「経験説」というこれまで行なわれてきたような議論を一步越える、新しいカテゴリーを開いたものだと言え

る。

ハイエクによれば、しかし、われわれの経験において、具体的なるものが中心を占め、抽象的なものは、その具体的なるものに由来するように思われるのは、「意識的」(conscious)経験のみから判断しているためである。確かに、主観的に言えば、われわれは具体的な世界に住んでいるのであるから、意識的経験がその中心を占めることは容易に認められる。だが、もし意識的経験から、他のあらゆる現象を推し測ろうとするならば、それは明らかに誤りであろう。というのは、人々が具体的に、それ故優位であると見做している、例えば感覚やイメージなどの意識的な経験は、その重要性に従って知覚される諸事象に対して、幾重にも分類(classification)――以下に述べるように――が課される結果もたらされるものだからである。⁽⁹⁾そしてこの幾重にも課される分類の極めて複雑な関係を解くことは、それが同時に起こる現象であるため、われわれには非常に難しい。だから、寧ろハイエクは、因果的な意味で、「具体的なるもの」は、精神(mind)が特定の感覚やイメージを経験し得るために、予めもたねばならない「抽象的なもの」の産物と考える。ここで重要なのは、ハイエクがそのように幾重にも課される分類の現象を、人間の精神によって理解(Verstehen)し得ないものと考えている点である。ハイエクの「抽象的なものの優位性」の命題は、かかる極めて複雑な現象に対してもつ人間の精神の不可避的限界という認識がその根本にある。

意識的経験のみが重要視されるならば、意識されない経験は、当然だが、精神的事象のヒエラルキーにおいて、下位のレベルに置かれ、ただそれは「下・意識」(sub-consciousness)に止まるものとしか見做され⁽¹⁰⁾ない。確かに、刺激(stimuli)が人間をして行為を引き起こす神経過程の多くは、中枢神経の低位を通るから意識されないものであるが、しかしこのことは、意識されないが故に重要でない⁽¹¹⁾と結論を下すことを正当化するものではない。実際、われわれが

意識し得る経験は、われわれが無意識に経験している中の、極く一部に過ぎないのである。何故なら、それは、中枢神経の非常に高位のところを通るからである。従って、人間の意識には現れないが、意識的経験を支配しているこのプロセスは、「下・意識」ではなく、「超・意識」(super-consciousness)と呼ぶべきである、とハイエクは言う。⁽¹¹⁾

つまり、われわれが意識において経験するものは、われわれの意識し得ない過程の一部に過ぎないか、またはその結果であると考えてよい。その理由は、意識の過程を含む、超・意識の構造による分類が何重にも課されることによって、特定の事象に特定の位置が与えられ、それによってわれわれは意識的な事象として経験するからである。ハイエクはこのようなプロセスを、「傾性」(disposition)が、幾重にも重なることによる「特化」(specification)と表現している。⁽¹²⁾ここに「傾性」とは、「分類」によって意識的、無意識的過程が、ある方向をとるように置かれている状態のことである。ハイエクは、このようなプロセスが、「抽象的なものの優位性」のもつ機能のメカニズムである、と述べている。⁽¹³⁾

「傾性」という概念を用いるなら、要するに「抽象」(abstraction)とは、一定の類(class)の行為へ向いている一つの「傾性」ということになる。有機体(organism)にある種の一定のものではない―反応によって、一定の類の刺激に反応させる。従って、われわれが感覚(sensation)に帰しているさまざまな特性(qualities)も、感覚が引き起こす傾性ということができる。また、われわれが特定の経験やそれに対する特定の反応を示すのは、一定の類の行為へのこうした傾性が幾重にも重なり合って、特定の刺激と特定の行為が結合し、特化されるからである。つまり「傾性」が特定の行為の前提として仮定される。ハイエクの抽象の優位性の概念の基本的な考えは、ほぼ以上のようにまとめることができるであろう。

(ii) 抽象的規則と秩序

以上のことから、「抽象的なもの」と「具体的なもの」との因果的な関係は、大体明らかにされたと思うので、次に、「傾性」(抽象的なもの)から特定の行為(具体的なもの)へのプロセスの問題に移ろう。ハイエクは「規則」(rules)という概念に、独自の内容を与えることによって、このプロセスの解明を試みている。「抽象的規則」(abstract rules)という概念がそれであって、勿論これには、具体的な規則というものも含まれる。ハイエクは、この「抽象的規則」の概念を手懸かりとして、精神的現象、更に社会的現象を理解しようとする訳だが、これについては後に詳しく論ずる。ここでは先ず、幼児の言語習得過程を一つの例として挙げ、次第にこのプロセスを説明していくことにしよう。

幼児の言語習得過程は、ハイエクが「抽象的規則」を説明する際、しばしば挙げる例である。⁽¹⁴⁾ 勿論これまでも、精神や社会のように極めて複雑な現象を説明する場合、よくこの例が引き合いに出されてきた。そこで問題とされるのは、何故幼児でさえ、信じ難いほど微妙な言語メカニズムを習得しうるのか、ということである。幼児は、文法やイディオムについて殆ど何も知らないが、それでも非常に複雑な言語を操ることができる。ハイエクは、これを可能としているのが「言語感覚」(Sprachgefühl)であって、言葉でいまだ表現されていない規則に従う能力であるという。F・カインツによれば「言語感覚」は、言語使用を導き、正しいものとそうでないものを弁別する規範によって形成される。⁽¹⁵⁾ こうした言語感覚が従う、いまだ言葉では表現されていない規則が、即ちハイエクのいう「抽象的規則」の一つをなすものである。この場合、文法やイディオムが、その中の具体的な規則ということになる。これは、G・ライルが「事実を知ること」(knowing that)と区別した「方法について知ること」(knowing how)の考⁽¹⁶⁾

えと似ている。スポーツにおける「技」(skill)などのメカニズムは、後者の考えによってはじめて理解されうる。「方法について知ること」も、やはり、「抽象的規則」に従う能力からなっていて、必ずしもその規則のすべてが、明示的に示される必要はない。

さて、言語感覚を導いている「抽象的規則」も一つの「傾性」である。言うまでもなく、「抽象的規則」に従って行為する能力は、言語の使用よりはるかに古く、言語の発達は、既に存在している非常に多くの行為に関する抽象的規則によって導かれてきた、といってよい。要するに、行為に関する抽象的規則が人間によってなされる、あらゆる現象を支配しているのである。かかる故にハイエクは、われわれがもたらすあらゆる現象を導く「精神」を「抽象的な行為規則の体系」(a system of abstract rules of action)と定義するのである。⁽¹⁷⁾従って、行為の領域で、「抽象的なものの優位性」というのは、次のようになるであろう。即ち、一定の属性をもつある「類」の行為への「傾性」が現われ、こうした「傾性」が幾重にも重なって、特定の行為が決定される。⁽¹⁸⁾別の言い方をすれば、ある「類」の行為を規定している「抽象的規則」がいくつか結合して、各々の特定の行為を決定する、このようになる。

ところで、ハイエクが人間の「精神」を「抽象的な行為規則の体系」と定義したのは、どのような意味をもつものであろうか。多分そこには、二つの意味があると考えてよいだろう。一つは、人間の「精神」というものが、極めて複雑な現象に対して、不可避的に限界を有しているということ、いま一つは、それにも拘わらず、人間の行為や知覚といった極めて複雑な現象が、「規則」——勿論、抽象的な規則だが——によって導かれるものであるということ、この二つが考えられる。後者に関してハイエクは、「規則に導かれる行為」(rule-guided action)、「規則に導かれる知覚」(rule-guided perception)といった用語を使っている。⁽¹⁹⁾そしてハイエクは、ここから極めて重要な考えを引き

出す。即ち「パターン」(pattern)あるいは「秩序」(order)という概念がそれである。「パターン」も「秩序」と基本的には同じ概念であるが、どちらかと言えば、後者の方がより広い意味で使われている。ハイエクは、「行為パターン」(behaviour pattern)、「知覚パターン」(perception pattern)あるいは「感覚秩序」(sensory order)「社会的秩序」(social order)とづいた言い方をしている。しかし、「パターン」も一つの抽象的秩序であることに変わりはない。

重要なことは、人間の精神が、知覚や行為のような非常に複雑な現象に対して、それを規定している原因を一義的に確定したり、そうした現象を細部にわたって、その特定の位置まで明示的に述べることはできないということ。そしていま一つは、それにも拘らず、抽象的な規則体系としての人間の精神に呼応して、知覚や行為が一つのパターン、あるいは秩序を示すということである。従って、われわれが把握し得るのは、この「パターン」、「秩序」に限定されるということ、これがハイエクが「理解」(Begreifen, 「了解」と訳した方がよいかもしれない)という用語で示している内容であって、彼の体系を構成している最も重要な考えの一つである。そこで次に、「科学」という用語を使うことによって、以上の議論をより厳密にしよう。

(iii) 抽象と科学の問題

イギリスの経験主義の貢献は、人間の「理性」(reason)というものを深く洞察し、それに基づいて社会現象の理解に努め、それに相応しい方法で社会科学を発展させたことであった。だが、J・ロックやD・ヒュームにしても、自然科学に対しては、満足できるような議論を展開するには至らなかった。彼らが十分説明し得なかった、「精神」と「社会」と「科学」という三つのカテゴリーの関係を、統一的、総合的に把握する認識論を確立したのがハイエク

である。

イギリスの経験主義者達は、「理性」を何が善であり、何が悪であるかを判断し、人間の行為にある価値基準を与える能力と考える一方、それは知的能力に対して限界を認識させるある種の規律と見做した。彼らが、社会現象の考察の中から発見した「一般的規則」(general rules)という概念は、言わば、人間の行為における理性の能力の機能として考えられる。しかし彼らは、この議論を一步進めて、自然科学の領域まで適用することはしなかった。思うにそこには、社会現象の考察においてなされたとき、一般的なるものの重要性の認識が、精神現象の理解において十分徹底されなかったからである。ハイエクは、「抽象的なものの優位性」という命題を確立することによって、精神現象と社会現象と自然現象の統一的、総合的把握を可能とした。彼は、その心理学、社会科学の研究を通して、この命題に導かれたのであるが、またK・ポパーなどの「科学哲学」に学ぶところも多かった。⁽²⁰⁾

ハイエクは、「抽象的なものの優位性」の命題から、科学一般が取り扱う対象が「抽象的なもの」に限定されることを明らかにしている。これは、既に述べたように、人間のもつ「精神」(狭く言えば理性)が不可避免的な限界を有しているからであって、われわれが理解し得るのは、知覚パターンや行為ハターのように「パターン」や「秩序」といった抽象的なものに限られるからである。このことは、自然科学の分野にもそのまま当て嵌る。例えば、結晶体を作る場合、われわれは、結晶体を構成している個々の分子を直接配列することによって、結晶体を作ることではない。⁽²¹⁾われわれが作ることができるのは、結晶体が形成される条件(Voraussetzungen, or conditions)に限定される。たとえこの目的のために、既知のさまざまな「知識」を使っても、個々の分子が一つの結晶体の中で占める位置を、予め確定するといったことはできない。そのような「条件」によって限定されているものが、即ち「抽象的な

もの」である。それは、他面この例からもわかるように、科学というものが、個別的、具体的な事象に関する知識からはなっていないことであって、「知識」自体が「消極的」(negative)なものであり、従ってそれ自身限界をもっているということである。社会科学における知識の「消極的」な性格については、既に、社会科学方法論を論じたところで簡単に触れておいた。ハイエクが、われわれの知識の「制度的限界」(the constitutional limitation)⁽²²⁾というのは、以上のように、人間のもつ理性に限界があるということ、知識自体にも限界があるという二つの側面をもっている。

このようにハイエクは、抽象の優位性の認識に基づき、「精神」、「社会」、「自然」に関する知識の統一的、総合的理解を行なった。ところで、ここにいう「知識」について、いま少しく述べておこう。ハイエクによれば、知識とは「原則の説明」(explanation of the principles)⁽²³⁾つまり、原則に関するものであり、しかもそれは、一つの仮説である。⁽²³⁾ 知識が、原則の説明に限定されることは、先に述べた、知識のもつ制度的限界から当然の帰結と思われる。ハイエクは、この「原則の説明」をしているのを「理論」(theory)と呼ぶ訳だが、それはまた一つの仮説であるので、常に「検証」(test)を伴わなければならない。ただこの場合、自然科学と社会科学とは、多少異なるところがある。自然科学においては、「実験」によって「検証」がなされるので、その理論と検証の間には極めて高い蓋然性が認められる。これに対し、社会科学においては、現実の実験というものが不可能であるから、理論と検証の間に、偶然的要素を避けることは困難であろう。しかし、自然科学にしろ、社会科学にしろ、常に「反証可能性」(falsifiability)に晒されていることにおいて同じである。それは、「抽象的なもの」が、いつも変化に従属していることを意味している。

抽象の優位性の認識に基づいたハイエクの科学論の輪廓は、ほぼ以上のように描けるであろう。詳しくは以下の「感覚秩序」、「社会的秩序」のところで論ずるが、そこに行く前に、いま一度次の点に注意を促がしておこう。それは、ハイエクの「抽象的なものの優位性」の命題が、「精神」、「社会」、「自然」の三つの現象を統一的に把握させることを可能にするというに止まらず、近代以前の「神人同形同性論的」認識論に代わる、近代社会に対応する認識論を提供するものであるということである。抽象の優位性という認識は、近代初期のイギリスの自由主義者達が、実は、言うべくして述べ得なかった、彼らの思想の根底にあったものではなかっただろうか。これについての詳しい論述は、別の機会に譲るが、わたしはそのような考えている。

注

- (1) Hayek, F. A., *The Sensory Order. An Inquiry into the Foundations of Theoretical Psychology*, 1952, p. 25.
- (2) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 3, 1979, p. 200. 「ヒューマン・ナチュラリズムの心理学的再評価に対するかなり期待をかけた論文である」。
- (3) Machlup, Fritz, *Hayek's Contribution to Economics*, in *Essays on Hayek*, 1976, p. 45.
- (4) Barry, Norman P., *Hayek's Social and Economic Philosophy*, 1979, pp. 11-5.
- (5) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 1, 1973, p. 30.
- (6) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, p. 35.
- (7) *Ibid.*, p. 36.
- (8) Hayek, F. A., *The Sensory Order*, 1952, p. 42. 参照。
- (9) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, p. 36.
- (10) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 61.
- (11) *Ibid.*, pp. 61-2.

- (12) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, p. 40.
- (13) Ibid., p. 48.
- (14) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 43.
- (15) Ibid., p. 45.
- (16) Ibid., p. 44. 「know how」をドイツ語の「können」, 「know that」を「wissen」または「be acquainted with」を「kennen」として理解しよう。
- (17) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, p. 43.
- (18) Ibid., p. 42.
- (19) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, pp. 43-5.
- (20) ハイエクの *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, は K・ホバーに捧げられている。しかし、わたしはハイエクの考えの方がより深いと思う。これは又、別の機会に論ずるつもりである。
- (21) Hayek, F. A., *Arten der Ordnung*; in *Freiburger Studien*, 1969, S. 35.
- (22) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. I, 1973, PP. 11-5.
- (23) Hayek, F. A., *The Sensory Order*, 1952, p. 182.

(二) 感覚秩序または精神的秩序

ハイエクの心理学の分野での貢献に対し、最近、一部の心理学者の間に再評価する動きが出てきているが、社会科
 学者でその重要性を指摘する人は、まだあまり見られない。しかし、既に述べたように、ハイエク体系の中心に位置
 している「抽象的なものの優位性」の命題は、心理学と社会科学の研究を通して明らかにされたものである。そし
 て、ハイエク自身も告白しているように、その過程で果たした心理学の研究の役割と社会科学のそれとは、ほぼ同等

の比重をもっていた。感覚秩序に関するハイエクの考えの要点は、上に述べた通りであるが、以下、その構造について、いま少しく見ることにしよう。

(i) 神経系と分類 (classification)

ハイエクが理解している心理学は、自然現象に関する知識を所与のものとしながらも、自然科学によっては説明し得ない精神現象の質的側面を説明するものである。ハイエクは、これを、「心身問題」(the mind-body problem)といった伝統的な議論を避けることによって、一つの解決を試みている。⁽¹⁾ というのは、われわれの有している知識が、自然的事象に関するものなのか、それとも精神的なそれなのか、正確に示すことができないためである。そこでハイエクは、「感覚諸特性の秩序の決定問題」(the problem of the determination of the order of sensory qualities)を選択することによって、この問題の解決を行なった。⁽²⁾ 所謂この感覚心理学と呼ばれるものは、H・ヘルムホルツ、F・バルトレット、更に、ゲシュタルト学派などによって展開されてきたのであるが、⁽³⁾ ハイエクはこれらの成果を踏えつつ、その欠点を補い、より一般的にした。

さて、ハイエクによれば、この感覚秩序に関する中心問題は、異なった刺激が神経系に及ぼす影響、またさまざまな刺激がいかに神経系によって分類されるか、というところにある。神経系(nervous system)は、受容器で受けとられた刺激に反応して興奮を生じ、これを効果的に伝える装置である。そして、ハイエクの独自の見解は、神経系を「分類」の装置と考えているところに見られる。⁽⁴⁾ われわれの感覚は、この神経系で行なわれる分類の一つの行為だと考えられる。ハイエクは刺激群が中枢神経の組織化に及ぼしうる永続的な効果を「連鎖」(linkage)と呼んでいるが、⁽⁵⁾ 分類は、過去のこの連鎖によって神経系の下で作られる「結合」(connections)に基づいている。個々のインパルス

あるいはインパルス群は、それが発生した時、他のインパルスを引き起こすが、この後者のインパルスが過去において通常伴っていた刺激に対応する。前者の第一次インパルスが、その獲得された結合を通して、後者の第二次インパルス即ち第一次インパルスの「後続」(following)^(a)を作る。この後続の部分的、または全体的な一部が異なった形態の分類を規定するのである。

感覚特性 (sensory qualities) は、原子のような孤立的な事実ではなく、神経系が対象物を分類している一組の關係だといえる。従って、それは、感覚秩序という構成的な秩序の部分としてのみ意味をもつのである。これを逆に言えば、外的世界に関するわれわれの知識が、主観的に知られた事実の一つの秩序に関する知識になるように分類される、ということである。個々の刺激、あるいは刺激群—外的世界のものであれ、有機体自身から生じたものであれ—が、感覚秩序の内部で特定の意味をもつのは、特定の反応によってではなく、無数に近い他の刺激と組み合わせられた場合のみ、異なった意味が与えられる。われわれが知覚するのは、個別的対象物の特定の属性ではなく、その対象物が他の対象物と共通にもつ属性である。ハイエクは、このような知覚を、一つの解釈 (interpretation)、つまり、何かを一つまたはいくつかの対象物の「類」に置くことであるとしている。感覚特性の特徴は、質的な分類が形成される、有機体の「分化反応」(differentiating responses) からなる。

既に述べたように、感覚特性は対象物の属性ではなく、神経系がその対象物を分類している一組の關係である。そして「経験」(experience) が、性的的事象に作用しながら、この關係をいろいろ変え、一つの秩序に配列するのである。この秩序が、それらの事象に「精神的」(mental) という意味を与える基礎となる。だから精神現象は、感覚秩序を作るとき働く、同じ分類過程の異なった形態として解釈されてよいであらう。ただし、「経験」は、神経系が対

象物を分類する関係を考えるだけであって、それをすべて支配するものではない。それ故、ハイエクの考えは、伝統的な「経験説」とは異なるが、またそういった意味で経験を強調する点、「生得説」とも違う。このように、ハイエクの感覚心理学は、精神を一つの分類過程を考えるとところに、その著しい特徴がある。

(iii) 超・意識的規則と精神的秩序

またハイエクは、「経験」と同じく、「学習」(learning)ということを重視する。ハイエクは、先に述べた「連鎖」を一つの学習過程として把握し、これが人間の精神をして、弁別(discrimination)を可能にさせると考える。つまり、それぞれの感覚経験は、それ以前の先・感覚的经验(pre-sensory experience)との結合によってのみ理解される、といった意味で。だが人間の精神が行なう分類は、深まることが十分あり得るのであって、だから、学習過程の一部は、再分類過程ともいえる。しかしこの再分類過程も一つの精神過程なのである。それ故、バリーの要約のように、次のように言えるであろう。即ち精神は、《tabula rasa》(J・ロック)ではなく、既に新し一経験を処理する精神的装置(mental apparatus)——この装置はある過去の経験の結果ではあるが——を備え付けている⁽⁷⁾。と。この点について、もう少し詳しく述べてみよう。

人間の経験が、新しい経験を処理するような装置を既に備えているということは、人間の精神が抽象的な規則、パターン、秩序といったものを認識する能力を、本来的に備えているということである。神経系は、運動パターンの作動体(effector)として行動する。また有機体は、ある種の運動パターン検出器(detector)をもっていることが、そこには仮定されている⁽⁸⁾。これについては、幼児の言語習得過程を例に挙げ既に述べたが、他人の行為の中に規則やパターンを知覚する能力は、極めて一般的且つ重要な現象である(それは特殊であっても、一つのゲシュタルト知覚の

一例である)。運動における「技」の学習は、それに対応する技に直接翻訳されるのであるが、それは技がもつ意味(meaning)を理解することによってなされる。⁽⁹⁾しかし、このような模倣が可能となる前に「同一化」(identification)が行なわれてなければならないであろう。即ち、異った感覚モダリティを通して、運動パターン間の間に対応性が確立されていなければならない。⁽¹⁰⁾だがこの場合、模倣者は、その技を構成している複雑な諸要素の一つ一つを知っている訳ではなく、またそれを明示的に述べ得る必要もない。

異った感覚要素—同じ感覚モダリティに属しているに拘らず—からなるパターン間の対応性の認識は、「感覚パターン」の転移メカニズム」(mechanism of sensory pattern transfer)を前提として⁽¹¹⁾いる。これは運動における技の学習の転移に似ている。つまり、抽象的なパターン、秩序を識別し得る能力が一つの場から他の場へ移転するメカニズムである。異った感覚が同じ抽象的パターンを形成し得るためには、特定のニューロン群のインパルスを通の属性としてもっていなければならない。というのは、このような場合のみ、異った感覚が、精神的過程に対し同じ影響を得るからである。異った感覚が、もしこの精神的過程に対し、大きいとか激しいとかいったものを引き起こすならば、それに対応するインパルスが、分類のある段階で同じ経験に達していなければならない。要するに、パターンの同異を認識させるのは、抽象的属性の間の諸関係構造の分類である。そして、このような抽象的な基本的関係が存在していて、はじめて、人間の行為も、ある一定のパターンの反応に対する「傾性」を作るのである。特定の行為は、こうした傾性が何重にも重なって規定される。

特定の刺激が特定の反応を引き起こすのではなく、ある「類」の刺激がある「類」の行為へのある「傾性」を作ることを可能にする。⁽¹²⁾ここに中枢神経の特徴的能力がある。そして、いま述べたように、これらの多くの傾性が幾重に

も重なり合って特定の行為をもたらすのであるが、しかし、われわれはこうした事象を明示的に述べることはできない。それは余りに複雑な現象だからである。だからハイエクは、これが理解されるには、刺激閾を超えているため意識に上らない刺激、あるいは、無意識的反応といったものが、その前提になければならないとする。だが前述したように、人間の精神的事象の多くが、無意識の裡に経験されるのは、寧ろそれが、中枢神経の最も高位のところ通るからである。それ故ハイエクは、人々が特定の行為（感覚、思考）に導かれるには、その前提に「超・意識」、そして、両者を結びつける「超・意識的規則」(supra-conscious rules)が存在しているからだと考える。⁽¹³⁾これは、運動の「技」における学習の転移、また、「感覚パターン」の転移メカニズムと同じように、その前提に、抽象的なものの基本的な関係というものが仮定されて導かれた概念である。ハイエクが、人間の精神を「抽象的な行為規則の体系」と定義するのは、単にそれが不可避的な限界を有していることを指摘しただけでなく、人間の精神的過程の抽象的性格の中に、「規則」というものを認識し得る能力を予めもっていることを示したためであった。「精神的秩序」(mental order)とは以上のような極めて複雑な、感覚、精神過程の中で展開されるその抽象的な側面といえるだろう。

注

- (1) Hayek, F. A., *The Sensory Order*, 1952, p. 1.
- (2) Ibid., p. 2.
- (3) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, p. 38.
- (4) Hayek, F. A., *The Sensory Order*, 1952, p. 55.
- (5) Ibid., p. 104.

- (9) Klüver, Heinrich, Introduction; in *The Sensory Order*, 1962, xix. 以下、クレーベルの解釈に従っている。
- (7) Barry, Norman P., op. cit., p. 13.
- (8) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 45.
- (9) Ibid., p. 59.
- (10) Ibid., p. 48.
- (11) Ibid., p. 49.
- (12) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 1, p. 30.
- (13) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 61. ハイエクが、無意識の世界や、超意識の規則などを問題とするので、しばしば「フロイトやユングなどの「精神分析学」や「深層心理学」と比較される。しかし、ハイエクも述べているように、それらとは根本的といってもよいほど異ったものである。「精神分析学」や「深層心理学」は、まだデカルト的二分法から脱れていないとハイエクは指摘している(*Law, Legislation and Liberty*, 1973, Vol. 1, p. 31.)。またハイエクは、特にフロイトの心理学に対して、それはマルクスと同じ現代という「理性の時代」における迷信の一つであると批判している(*Law, Legislation and Liberty*, Vol. 3, 1979, pp. 175-6.)。

(三) 社会的秩序

ハイエクは、無数の人々からなる社会が、いかにある「秩序」(order)を形成するのかを明らかにすることが、「社会理論」(social theory)の中心的課題であると述べている。⁽¹⁾このような「社会的秩序」(social order)という考えは、彼が心理学の研究において、感覚秩序あるいは精神的秩序といった問題を扱っていた時、次第に脳裡に描き出されてきた概念である。また、それと並行して進めていた社会科学方法論の研究において、この問題が社会科学の成立と極めて密接に関わっていることを明らかにしていた。しかしハイエクの「社会的秩序」の考えは、彼が「抽象的な

るものの「優位性」の命題を確立することによって、真にその社会科学の意味をもつことができた、と言った方がよいであろう。以下、そうした観点から、ハイエクの社会的秩序の問題を論じてみよう。

(i) 二つの社会的秩序

社会科学の分野で、「秩序」の問題を主要なテーマとして取り挙げてきたのは、西ドイツのオルドー学派、なかでも、W・オイケンやF・ベームなどであった。ハイエクもこれらの人々の影響を受けていることは勿論であるが、しかし、そこには自ら彼独自の見解が示されている。「社会的秩序」を「自発的秩序」と「設定された秩序」の二つに分ける考えは、既にオイケンにも見られたが、⁽²⁾ハイエクは、この問題を歴史的、発生的に捉えたとともに、更に「抽象的なものの優位性」という彼の根本の認識論に基づいて論じた。

(a) cosmos : 自発的秩序

「社会的秩序」に関する考えにおいて、近代以前と以後とでは、著しい違いがある。近代以前においては、社会の秩序は神の命令や支配者の意志によって秩序づけられるものと信じられていた。しかし、中世末期から、分業が急速に発達し、知識が広く社会に分散されるようになると、社会にもたらされる成果が、神や支配者といった特定の者の命令や意志といかなる関連にあるかが明瞭でなくなってきた。かくて次第に、人間社会に発生する現象の多くが、多数の人間の諸行為の結果であっても、ある特定の者の設計によってもたらされたものでないことが経験的に実証されてきたのである。社会科学の成立は、このような近代社会の生成、発展と密接な関係をもっていたといえる。即ち、社会科学が解明しなければならなかったのは、社会全体に共通の目的がなくて、それで異った目的をもつ諸個人の行為の結果が、果たして社会に秩序をもたらし得るか、ということであった。A・スミスは、各人の個別的な行為が、

「見えぬ手」(invisible hand)の導きによって、「自らの意図せざる」目的を促進させ、社会に有益な成果をもたらしていることを示した。⁽³⁾それはどのようにして、『Great Society』(スミス)に秩序をもたらしているのだろうか。

古典的自由主義的者達は、この問題に対し、Great Societyに秩序を導いているのは「一般的規則」(general rules)であると考えた。ここで重要なのは、一般的、即ち抽象的というところにある。それは、特定の目的に依存していない規則ということの意味している。では何故、「一般的規則」がGreat Societyを導いて秩序をもたらし得るのか。その一つは歴史的な理由からである。およそ「規則」というものは、先ず小さな、目的によって結合した集団において発生するが、それがより大きなグループに適用範囲を拡げるに伴い、普遍化されていく。規則は、そのような普遍化の過程で、次第に、共通した具体的な目的との結び付きを薄くしていくのである。従って、近代のようにGreat Societyにおいて、平等に社会の成員間に適用し得るのは、一般的、抽象的な規則に限られる。そして、一つの理由は、彼の抽象の優位性という根本の認識論からである。つまり、ハイエクは具体的な規則（特定の目的に結び付いた）よりも、抽象的な規則（特定の目的に結び付いていない一般的規則）の方が、より本来的であると考ええる。また、そこには、精神現象における「超・意識的規則」と同じような関係が、社会現象と「一般的規則」との関係にも認められる。このような一般的規則に導かれて形成される社会的秩序を、ハイエクは、「自発的秩序」(a spontaneous order)、あるいはギリシア語で《cosmos》と呼ぶ。⁽⁴⁾

ところで、規則がそうした普遍化のプロセスの中で、次第に、特定の共通した目的との結び付きを希薄にしていくことは、逆に規則が個人的な行為との関わりを強めていくということである。蓋し、個人的な行為に関する規則は、

いかなる時代、いかなる地域にも妥当する普遍性を有しているからである。これに対し、特定の共通した目的と結び付いた規則は、時代や地域の制約性から逃れることは難しい。それ故、「一般的規則」とは「個人の正しい行為に関する規則」のことであるといつてよく、ハイエクは、ギリシア語の《nomos》という語をこれに当てている。それは法律用語で言えば「私法」(Privatrecht)となろうから、ベームのごとき、私法によって導かれる社会を「私法社会」(Privatrechtsgesellschaft)と呼んでいる。⁽⁵⁾ またこれは、個人の重要性が極めて大きな意味をもっている近代社会に対応しているといえよう。何故なら、知識の分散化が急速に進んでいる近代社会では、いかなる人といえども、各人が有する断片的な知識を、各人の個別的な目的のために利用しなくてはならないからである。

さて、「自発的秩序」、即ち《cosmos》は、特定の目的をもたない一般的規則によって形成されるものであるから、いきおいわれわれの支配力は小さくなり、具体的な事柄には及ばない。だが寧ろ、そうした一般的規則に従う場合のみ、各人は、それぞれ異った多様な目的を、自由に追求することができるようになるのである。そして、このような自発的秩序に依存することによって、われわれは、各人に分散的に存在している知識を、ある支配者の意志(設計)に従属することなく、最も有効に利用し得るのであり、従つてまた、その秩序の範囲を拡大し得る。つまり、自発的秩序に対するわれわれの支配力が限定的であるというのは、正確に言えば、われわれの有する知識が、自発的に形成される秩序の一般的、抽象的性格に規定されている、ということである。われわれが予測し得るのは、こうした秩序の一般的、抽象的な性格であつて、秩序を構成している個々の具体的要素ではない。

「規則」の普遍化は、小さな集団から次第にその空間を拡大させるに伴つて進むのであるが、それは規則の適用範囲が、同じ仲間集団同士から、見知らぬ不特定多数者へ広がっていくことである。地域間に限定された取り引

きから、国内間の交易、更に外国との貿易と、その経済活動の領域が大きくなってくるに従って、規則はそのような形で、普遍化していった。それは、財産 (property) と契約 (contract) という規則を各人が「学習」することを通じてなされたのであるが、それによって、見知らぬ不特定多数者への義務といった觀念が生まれてきた。これが、ハイエクのいう規則の普遍化のプロセスである。けれども、かかるプロセスが可能なのは、その根本において、人間の行為に「抽象的なもの」の優位性」という認識が成り立っているからといわねばならない。「抽象的な行為規則の体系」としての人間の「精神」は、自分の行為と他人の行為の中に、また各人の行為パターンと社会の行為パターンの、その一般的、抽象的規則を選択して、それを更に發展させる能力を備えているのである。

(b) *taxis*: 設定された秩序

A・スミスやD・ヒームなど、主にイギリスの古典的自由主義者達が明らかにしたことは、一般的な規則に導かれる「自発的秩序」に依存することによってわれわれは、そこから多くの成果を得るということであった。それは、彼らが人間の「理性」を過大に評価したからではなく、寧ろ理性の限界を知ることによって、理性がなしうるもの以上の成果を達成しうることを経験的に学んだからである。従って彼らは何故、一般的秩序をもたらしているかを明示的に述べることはしなかった、というより、それが、不可能なことを認識していた。

このようなイギリスの経験主義に対して、R・デカルトに溯る大陸の合理主義者達は、「理性の法」(law of reason) によって正当化し得ない人間の規則の妥当性を否定した。⁽⁵⁾ 彼らは、規則というものを人間の理性によって意のままに作ることができるものと考えていたのである。「良い法律を望むなら、現在あるものを焼き捨て、新しい法律を作れ。」と、ヴォルテールは言っている。このような考えは、更に社会制度の妥当性にまで適用され、理性のみが人間

の目的を達成し得るのであるから、社会制度も理性の法に従って作られたものであり、それ故、社会制度は理性によって予め作られた設計に基づいて構成されるべきであると、彼らは考えた。だから、彼らのいう規則とは、予め設定された目的を遂行するために作られた規則である。ハイエクは、かかる目的と結び付いた（具体的な）規則によって導かれる社会的秩序を「設定された秩序」(a made order)、あるいはギリシア語で《taxis》と呼んでいる。そして特定の目的と結びついた規則のことを《thesis》と呼ぶ。だがハイエクによれば《taxis》が適用されるのは、いつに「組織」(organization)の場合であるという。

《taxis》、あるいは「設定された秩序」は、特定の目的を追求する「組織」であるので、われわれのこの秩序に対する支配力は、「自発的秩序」に比べ、極めて大きいことができる。従ってそれは、自発的秩序のように、抽象的秩序ではなく、C・シュミットが言ったごとく、「具体的秩序」(konkrete Ordnung)である。⁽⁸⁾確かに、このような「設定された秩序」は、それが具体的な秩序であるだけに、人間の理性が最も有効に機能し得る領域といえるだろう。だが、社会は組織ではなく、無数に近い個人、また彼らによって作られた多くの集団や組織からなる極めて複雑な秩序である。大陸の合理主義者達が単純に信じている科学の力を以てしても、このような複雑な秩序がいかに形成されているのかを、明示的に述べることは不可能である。文明(civilisation)は言うまでもなく、科学の進歩によって発展してきたのであるが、しかしそれは、われわれが直接にはもたない知識からその多大な恩恵を受けているという事実には依存している。即ち文明は、われわれの「知識の制度的限界」を、広く分散されて存在している知識の有効な利用を可能にすることによって克服し、それを通して発展してきたのである。が、このような知識の限界は、科学の能く克服し得るものではない。何故なら、科学は個別的、具体的事実に関する知識によってではなく、少なくとも

もこれまでさまざまな検証に耐えてきた諸仮説からなっているに過ぎぬからである。

社会を「設定された秩序」、つまり「組織」と見做す考えは、レーニンの「単一の事務所、単一の工場」⁽⁹⁾という表現の中に最もよく示されている。社会を一つの組織と見做す考えは、サンシモン、コント、ヘーゲル、マルクスを経てレーニンへと引き継がれていった、大陸の合理主義の根底にある社会思想である。しかしわれわれは、ここに、驚くべきパラドックスを見ない訳にはいかない。即ち、われわれは彼らの思想の中に、「科学主義」(scientism)と「神人同形同性論」(anthropomorphism)との奇妙な混合物を見ることが出来る。それは、彼らが、余りにも科学の力を絶対視して、科学の有する限界を認識しなかったため、それが却って、近代のような極めて複雑な社会の理解を妨げたのである。彼らは、イギリスの経験主義者達が見出したような、人間の行為であっても、人間の設計にない領域を認識することができなかった。彼らは、一般的規則や抽象的秩序といったものが、社会の無数の成員間において、また多くの集団や組織間において、あるいはさまざまな制度間において、ある調節を果たしているということに気付かなかった。そして、自分達が設計した青写真が、思い通りに運ばないことを知った時、彼らは「強制」(coercion)という手段に訴えて、その達成を計った。理性の命令に従うことが自由であると考えていたので、それは彼らにとって、何ら問題とするに足りなかったのである。これに対し、イギリスの古典的自由主義者達は、一般的秩序や抽象的秩序を、自由の問題に関わらしめて理解し、それらに従うことが寧ろわれわれの自由の領域を拡大せしめるのだと考えた。

結局、大陸の合理主義者は、ギリシア以来の《physis》と《thesis》という認識論から脱け出ることができなかった。イギリスの古典的自由主義者達が、この伝統的な二分法を克服したのは、彼らが言うべくして、述べ得なかった

「抽象的なもの優位性」という認識論に立っていたからだと言えるであろう。

(ii) 経済的秩序 (catalaxy)

近代は、A・スミスも「商業社会」(commercial society)⁽¹⁰⁾と言っていることく、経済的側面が非常に大きな比重を占めるのであるが、ハイエクは、近代の社会的秩序、即ち《cosmos》の経済的側面を「カタラクシー」(catalaxy)と呼んでいる。⁽¹¹⁾それは、普通、市場経済と呼ばれているものと同じであるが、ハイエクは市場経済という用語を使わず、「カタラクシー」というギリシア語を用いる。ハイエクによれば、厳密な意味で「経済」(an economy)といえるのは、例えば、家庭、企業、国家などの組織のように、一定の目的ヒエラルキーをもった経済単位である。⁽¹²⁾だが、市場の自発的な秩序は、そのような経済単位が相互に複雑に作用しながら生じたのであるから、厳密な意味での経済とは根本的に異なったものといわねばならない。だからハイエクは、組織と同じ性格をもつ経済と区別すべく、市場の自発的秩序を表わすためにカタラクシーという用語を使うのである。因みに catalaxy は、ギリシア語の動詞 *katalattein* から派生した言葉で、「交易する」、「交換する」という意味の外に、「仲間に入れる」、「敵から味方に変わる」という意味がある。⁽¹³⁾

経済と区別されるカタラクシーは、従って、特定の目的ヒエラルキーをもたない、多くの経済単位の相互作用から生まれる一つの自発的秩序である。それは、各経済単位による市場における交換過程を通じて形成される。カタラクシーは、共通の目的はもたないが、個人を含む無数に近い経済単位の、それぞれ異なった目的の達成を可能にする。それは、各経済単位が、経済に関する最も確実な情報として、価格 (price) というシグナルを利用しながら、社会に分散されている知識を収集、伝達することによって達成される。価格というシグナルは、われわれに、何を、どのくら

い、またいかにして、生産したらよいかについての情報を提供する。われわれはその情報に基づいて、見知らぬ不特定多数の人々の必要を、どのようにして満たせばよいかを知り得るのである。またそれは、一般に「競争」(competition)と呼ばれる「発見的方法」(Entdeckungsverfahren)⁽¹⁴⁾を通して、最も効果的に達成し得る。われわれが、競争という発見の方法に従うのは、最も低い費用で、最も効率的な生産、つまり諸資源の最適利用を可能にするからである。

だがカタラクシーは、「経済」と異なって、各人に、彼が貢献した功績を、彼が受けとる所得の間に、直接的な関係を約束するものではない。寧ろ、各個人の所得は、多くいかなる人によっても予測し得ないような状況によって支配されている。何故なら、既に述べたように、カタラクシーは、一定の目的ヒエラルキーというものをもたないからである。それは、各経済単位がおのの目的を追求するために、交換過程、つまり市場メカニズムを通して形成される秩序である。だからカタラクシーは、それ自身の装置を維持する以外の目的をもたない。ハイエクは、「厚生経済学」(welfare economics)などの現代経済学が、市場の不完全性、あるいは失敗を非難するのは、catalaxyをあたかもeconomyのように取り扱っているところからきていると述べている。⁽¹⁵⁾カタラクシーにおいては、いかなる観察者も、市場過程の結果を正確に予測することはできない。またハイエクは、新古典派経済学(neo-classical economics)が、市場経済を「一般均衡」(general equilibrium)というタームで理解していることについても批判している。⁽¹⁶⁾新古典派の一般均衡モデルでは、嗜好や、技術、資源などに関する知識が与えられれば、市場過程の結果は機械的に予測し得るものと考えられている。確かに、市場過程はある均衡へと向うが、しかし、それは、データーの変化によって何時でも攪乱されるような均衡へのプロセスなのである。ハイエクによれば、「経済学」とは、広く社会

に分散されている知識、各人には断片的にしか与えられていない知識が、どのようなプロセスを通して、各経済単位に伝達されるかを研究する分野である。

カタラクシーは、社会的秩序としての自発的秩序、即ち *cosmos* の経済的側面である。従って、カタラクシーも、当然、「一般的規則」の支配を受ける。ところで、いかなる社会も *cosmos* と、特定の目的をもった *taxis* との二つの秩序の上に築かれるが、しかし、この二つの秩序を人間の恣意によって適当に組み合わせてよいということにはならない。自由社会においては、各人はそれぞれの個別的目的を達成するためには、さまざまな組織に参加する訳だが、各人、各組織間、各経済単位間の協業は、自発的秩序を形成する諸力によってもたらされるのである。⁽¹⁷⁾

注

- (1) Hayek, F. A., *Arten der Ordnung*; in *Freiburger Studien*, 1969, S. 32. またそれは、「社会政策」(Sozialpolitik) の中心課題である。⁽¹⁸⁾
- (2) Eucken, Walter., *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*, 1952, S. 373.
- (3) Smith, Adam., *The Wealth of Nations*, The Modern Library, p. 423.
- (4) Hayek, F. A., *The Confusion of Language in Political Thought*, 1968, p. 11.
- (5) Böhm, F., *Privatrechtsgesellschaft und Marktwirtschaft*, in *Ordo*, XVII, 1966, S. 75.
- (6) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 1, 1973, pp. 9-10. ハイネックは R・デカルトに溯る大陸的合理主義を「設計主義的合理主義」(constructivist rationalism) と呼ぶ。詳しくは、拙稿「自由と秩序に関する社会思想的的研究」(フタケとハイネックの社会哲学序説——「『世界経済』昭和五十二年一月号」参照。
- (7) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 161.
- (8) Ibid., p. 169.
- (9) Hayek, F. A., *The Road to Serfdom*, 1944, p. 89.

- (10) Smith, Adam, *The Wealth of Nations*, The Modern Library, p. 22.
- (11) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 2, 1976, p. 108.
- (12) *Ibid.*, pp. 108-109.
- (13) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 164.
- (14) Hayek, F. A., *Der Wettbewerb Als Entdeckungsverfahren*; in *Freiburger Studien*, 1969, S. 249.
- (15) Hayek, F. A., *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, 1967, p. 173.
- (16) Barry, Norman P., *op. cit.*, pp. 42-44. バリーは従って「L・ロビンズの有名な経済学の定義、即ち「諸目的とそれを達成するための代替的諸用途をもつ希少な諸手段との関係として、人間の行動を研究する学問」(L. Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 1932.)とハイエクの考えは全く異っていると述べている。
- (17) ハイエクは、このようなことが、今日、理解されにくくなっているのは、多くの人々が大きな組織の中で生活するようになってきたからだとしている。しかし現代のような組織社会においても《cosmos》の中で《taxis》が生かされていることには変わりないと考えている(Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, Vol. 2, p. 134-5.)。

むすび

ハイエクが新自由主義者といわれる場合、主にその経済、政治、法律の領域において、古典的自由主義者達が曖昧なまま残した点を明確にするとともに、現代に適した政策、あるいは改革案を提示したということで評価されている。ハイエクが与えた影響は、これらの領域だけでも、ミルトン・フリードマンの表現を借りれば、「恐るべき」(tremendous)⁽¹⁾ものであった。しかしわたしは、ハイエクのこれらの領域における貢献も、単純ではあるが明快な「抽象的なものの優位性」という認識がその根本にあってはじめて可能なことであった、と考える。実にこの抽象

の優位性の認識こそ、古典的自由主義者達が言うべくして述べ得なかった根本の認識論であった。十九世紀中葉以降 J・S・ミル以後といってもよい一のイギリスの思想家達が、⁽²⁾古典的自由主義者達の認識論を不十分として批判した点は評価し得る。だが波らは、それをドイツ観念論哲学で補なおうとしたため、結局、古典的自由主義を發展させることができず、⁽³⁾社会主義への道を開くことになったのである。この点に関する詳しい論述は、別の機会に譲ることにしたい。

注

- (1) Friedman, Milton., Foreword, xxi; in *Essays on Hayek*, 1976.
- (2) わたしが念頭に置いているのは、T・H・グリーンなどのイギリス理想主義、またその流れをくむフェビアン社会主義、その他、H・ラスキなどである。
- (3) ハイエクは、社会主義と民主社会主義を殆ど区別しない。*The Road to Serfdom*, 1944. など参照。